

world, at least it was a good day. I think that this part of China has been closed to foreigners until recently. Certainly several people said to me, "This is the first time I have ever spoken with a foreigner." Three times the bus had punctures and each time we stopped in a village and it took about 45 minutes to repair the tyre. There was no spare wheel. In one village they put 100 ducks on the roof, in bundles of ten (tied by the legs). While the punctures were being repaired, the ducks quacked on the roof. The people were very friendly and their farmhouses were large and beautiful. Again I didn't see any tractors. But I did see log hives hanging under the eaves of some of the farmhouses. When at the end of the journey I reached Chongqing at 10pm, I was looking forward to a hot bath. But at the hotel where I stayed, when I turned on the tap the water was cold, only cold.....The next morning I had to get up at 5.30 again to catch my flight back to Nagoya.

I needed more time. One week was not long enough. 40 million people live in Guizhou. Economists say that this is a very backward part of China, But my impression was that it is not so far behind the rest of China. Guiyang is a modern city with highways going out in all directions. As I said it looks like Hong Kong. Zunyi is like Okazaki in Aichi. The villages may not have so many tractors but in several places I saw television disks on the rooves of the houses. The people seemed to be well fed and cheerful. I wanted to learn about indigo dyeing. Mao put all of China into indigo dyed uniforms during the Cultural Revolution. And I learned later that Mao had liked to sleep in a bed with indigo dyed sheets. But I had no time to visit the villages of the minority peoples in southeastern Guizhou where most of the indigo dyeing takes place. But I want to go there again. It is a beautiful

place and I liked the people.



突然だが、豊橋とケンブリッジ（正しくは「ケインブリヂ」）は似ている。何故なら、「豊橋」という地名の由来は「豊川に橋が架かっている場所」ということであり、同様に「ケインブリヂ」は「カム川に橋が架かっている場所」が原義だからである。ついでながら「オクスフォード」は「牛が歩いて渡る浅瀬」を意味する。あの辺りではテムズ河の水深が、牛でも歩いて渡れるほどに浅くなっているのだ。

英国、特にイングランドの地名は、ある程度の知識があればその由来を容易に解読でき、それによってそこがどんな場所かを、さらにはその土地の歴史をある程度知ることが可能である。例えばマンチェスター、ウィンチェスター、チチェスターなど、「チェスター」が付く街は大抵、紀元前50年頃から西暦400年頃までの間ローマ人がブリテン島を支配していた頃に建てられた城下町である。「チェスター」は古期英語で「ローマ人の拠点」を意味する 'ceaster' が変化したものだからである。ランカスター、ドンカスターなどの「カスター」もこの 'ceaster' のヴァリエーションの一つであり、これらもかつてローマ人が城を建てたことから発展した都市である。

世界七不思議の一つにもなっている古代巨石群の遺跡ストーンヘンジの最寄りの都市として観光客を集めるソールズベリー、中世の時代に巡礼の目的地だったことで有名なカンタベリーなど、「ベリー」で終わる名前を持つ街の多くは、ローマ人

が引き上げた後にブリテン人が作った城下町である。この場合の「ベリー」は古期英語で「砦」（城には砦が不可欠である）を意味する 'burgh' の変化系の一つであり、したがって最後に 'burgh'、'borough' 或いは 'brough' が付くエディンバラ、ピーターバラ、ミドルズバラなども同様である。北海に面した美しい町スカーバラの市について詠ったイングランド民謡「スカーバラ・フェア」はサイモン＆ガーファンクルがリメイクして1970年代に世界的に知られるようになったが、この曲が日本語で「スカボロー・フェア」と表記されたため（S&G自身がそう発音している気がする）、スカーバラを「スカボロー」と誤記しているガイドブックをよく見かける。ドイツ、オーストリアあたりにはハンプルク、ザルツブルクなど「ブルク」が付く街がいくつかあるが、これは「ベリー」「バラ」のドイツ語ヴァージョンだ。古期英語が当時のドイツ語の一方言から変化発展して成立した過程を考えれば、この類似の理由はすぐに理解できよう。また現代英語で 'borough' は都市部の「区」を意味する。

エクスマス、ウェイマス、ダートマス、エイヴォンマスなどの「マス」は 'mouth' であり、これは「河口」を意味する。それぞれ順にエクス川、ウェイ川、ダート川、エイヴォン川の河口に位置している。そのエクス川のほとりにローマ人が建造した城下町が「エクス・チェスター」つまり現在のデヴォン県庁所在地エクセターだ。有名な港町ポーツマスが「港」と「河口」が合わさって成立した地名であることは想像に難くない。一方イーストボーン、パングボーン、セルボーン、シャーボーンなどの「ボーン」は「小川」が原義である。ノーベル賞作家ウィリアム・ゴールディング（正しくはゴウルディング）の小説『ピラミッド』は架空の田舎町スティルボーンを舞台とするが、そこには文字通りの「淀んだ小川」が流れており、それが因習に囚われ腐敗した田舎町における淀んだ人間関係を象徴しているのだ。

ハンティンドン、ウィンブルドン、スウィンドンなどの「ドン」は「丘陵」を表す 'down' が変化

したものであり、これらの町はみな丘の上、もしくは中腹にある。ただしロンドン（正しくはランダウン。しかし慣用には勝てない）は例外。これはローマ人の時代に「ロンディニウム」と呼ばれていたのを英語的に発音したもの。ロンディニウムの語源までは分かっていないのだが、ロンドンが丘の上でないことは誰でも知っている。尤もハンティendonはごく平らな沼沢地帯の、他より標高がほんの少し高いところにあるに過ぎないのだが、一方スウィンドンなんて日本語に直せば「豚が丘」ということになってしまう。「ドン」が 'down' であるのと同様ウェストン、ティヴァトン、トントンの「トン」は 'town' であるが、これは古期英語で「囲いを施した私有地」を意味する。現代英語のような「町」の意になるのは中期英語の時代以降である。例えばマイケル・ボンドの童話『くまのパディントン』で知られるロンドンのパディントンは、「パッド氏の囲った土地」に由来する。ここでの「パッド（氏）」と「トン」の間に来る 'ing' は所有を表すものであり、レディング大学がある街レディングは「赤い人たちの（土地）」ということである。「赤い」のはおそらく顔が髪であろう。この街の名前はことによると「レディントン」になっていたかも知れない。大学院時代の友人で、レディング大学というのは 'reading' 即ち講読ばかりを専門的に教えてくれる大学だと思っていた奴がいる。しかしもちろんレディングを含めてあらゆる大学というのは、切り売りされた知識の断片或いは情報処理など手先の技能ばかりを身につけるところでは決してなく、最終的には学問の方法（即ちその大部分は本の読み方）を学ぶ場であって然るべきなのだから、彼の「解釈」もあながち間違っていたとは思えない。

語尾に 'ham' が付く場合、大抵その'h'は発音されず直前の子音に「アム」をつける。フラム（「フルハム」ではない）、ブロクサム（「ブロクスハム」ではない）、ニューナム、ラヴェナムなどがそれである。この場合の 'ham' は 'home' の古い形であり、「家」「拠点」を意味する。現代英語で 'village' よりも小さい「村」（独自の教会を持たず、近隣の

village)に従属する集落)を意味する 'hamlet' にこの古英語の痕跡を見ることが出来る。パーミングム、バッキンガム、ノッティンガムなどに見られるように、所有の 'ing' と併用され「-インガム」の形を取ることも多い。またハンプトン、ノーサンプトン、サウサンプトン、オウカンプトンのように、「ハム」と「トン」が同時に使われることも少なくない。多くの場合、'ham' と 'ton' を連続して発音すれば自然にそうなるように、間に 'p' 音が挿入され 'hampton' になる。

イングランドをある程度北上すると、「ビー」が最後につく地名が目につくようになる。あの楕円形の玉を使った球技の発祥地であるラグビー、競馬の発祥地であるダービー、ドラキュラの古城があるウィットビーなどである。この「ビー」は当時のスカンディナヴィア語で「農地」「村」もしくは「要塞」を意味する。この種の地名が北部に多い理由は、スカンディナヴィア半島のデイン人たちが9世紀頃北からブリテン島に攻めて来て、およそラグビーの辺りまでしか南下しなかったということだ。したがって、彼らが名付けた土地もこの辺りまでしかない。スコットランド最北端に近い町ウィック、ロンドンよりも北極圏の方が近い最果てのシェットランド諸島(シェットランド・シープ・ドッグで有名だが、実際この島に行ってもこの種類の犬はまず見かけない)における唯一の町ラーウィックなどの「ウィック」は同じくスカンディナヴィア語の「湾」に由来する。ただしベリック(スベリング上は「パーウィック」と読めるが、実際は 'w' の子音を発音しない)、チズィック(同様に「チズウィック」ではない)、ケズィック、ウォリック或いはオールドウィックなど、もっと南にある「(ウ)ィック」が付く地名の場合、「(ウ)ィック」は「住居」「(特定の目的に使用される)建物」の意である。英語で 'ch' のスベリングは「チ」と「ク」(共に無声音)の二通りの読み方があり得るが、そうすると 'ch' の綴りが 'k' に変化することもあり得る。従って、チズィックとケズィックは同じ地名のヴァリエーションであり、前者はロンドン西郊にあり後者は湖水地方

にあるが、共に「チーズを作る農家」を意味する。このように 'ch' と 'k' が入替可能であれば、当然「(ウ)ィック」はイプスウィッチ、サンドウィッチ、オールドウィッチのように「(ウ)ィッチ」にもなる。この場合子音 'w' が発音されることが多いが、一方天文台、世界標準時で知られるグリニッジ、オランダへ船で行くときの港があるハリッチ、高名な小説家を多く輩出しているイースト・アングリア大学があるノリッチなどのように、'w' が発音されず 'ch' が有声音化して「ィッチ」となる例も多い。

